

平成25年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	大府市立共長小学校	氏名	浜島 直美
-----	-----------	----	-------

1. 印象に残る写真2点

● 「ハイ、ポーズ」



カメラを向けると、我先にと集まってくる子どもの姿は、日本もラオスも同じだった。

● 「未来の画家」



紙に絵を描き、ポストカードとして売っていた。

2. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私は「わかり合い、助け合い、学び合う大切さを実感する」というねらいをもって、この研修に参加した。ラオスの現状を見て学ぶ中、青年海外協力隊が、現地の人と寄り添い、一緒に考えながら、相手国にとって一番良い方法、そして自分が帰国した後も持続する方法を探し出そうとしていた。彼らは、言葉の壁と文化の違いにとまどい、苦しみなながらも、あきらめず努力しようとしていた。自分の考えを通すのでは、成功しない。相手から学び、自分の出来ることと、相手国の望んでいることが一つになったとき、成功につながる道ができるのだと感じた。彼らのキラキラと輝く立派な姿の裏には、多くの努力がかかっているのだろう。この姿は、私が今まで行ってきた国際理解教育の在り方を見直すきっかけとなった。私が学んだことを児童に伝えること

により、国際協力の大切さを気づかせ、実際の行動に移してくれることを、心より願っている。相手を思いやる心、困難を乗り越え頑張ろうとする心、相手から学ばせてもらう謙虚な心。この3つの心が平和を作るのではないだろうか。授業を通して、この3つの心を伝えることが、私の目標達成につながると思う。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ラオスの人は、家族や親戚のつながりを、とても大切にする。インタビューやアンケートを通して、あたたかい家族愛を感じた。ラオスの子どもたちは、あたりまえのようにお手伝いをする。マーケットの店番、船頭、飲食店で料理を運ぶ、絵描きなど、それぞれ内容はちがっていたが、家族のために働くという共通点があった。そんな中で私が一番印象に残っているのは、働く母の横で6歳の男の子が小さな背中に1歳の妹をおんぶしてあやしている姿だった。まだまだお母さんにあまえたい歳なのに、妹の世話は自分の仕事のように思っている彼の姿は、とてもたくましく立派だった。ラオスは物質的にも近代的にもまだまだ途上国かもしれない。しかし、10日間ラオスに滞在し、心の豊かさを感じた。人間にとって何よりも必要なものなのではないだろうか。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

青年海外協力隊の本間さんは、バレーボールの指導者だ。元気で明るい女性で、子どもたちと上手に関係を作り、とても楽しそうに活動していた。しかし、本間さんはこの関係を作るのにとても苦労したようだ。ラオスに来て、文化や国民性の違いに戸惑い悩んだそうだ。言葉も気持ちも通じず、全く指示を聞いてくれない子どもたち。しかし、本間さんは諦めることなく、自分が繰り返しやって見せ、見て学ぶ方法を取り、子どもたちの心をつかんだそうだ。青年海外協力隊の皆さんと話して見つけた共通点は、どの方も日本とラオスの考え方の違いに何度も悩み、苦しみ、くじけそうになりながらも、ラオスの人のために考え、努力をおしまず、自分の出来ることを精一杯頑張っているということだ。相手の気持ちになって考え行動する大切さと、努力は相手の心を動かす最大の力ということを改めて感じる事ができた。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

アジアの障害者活動を支援する会の方々は、現地の障害者に対し自立と社会参加を促進するために、車いすバスケット・クッキー作り・美容院でのシャンプーなどを指導し、障害者が平等に尊厳をもって生活できるような社会の実現を目指し努力していた。車いすバスケットのメンバーは、地雷やポリオなど、日本では考えられない病気が原因なのだ。そんな人達にチャンスを与え、社会復帰が出来るように支援していた。自分に自信がもてず、引きこもりがちになった人の笑顔を取り戻すのは、とても難しいことだと思う。仲間を集め、励まし合い、学び合いながら練習を積み重ね、心をつ一つにして試合に臨む。私のねらいである「わかり合い、助け合い、学び合う大切さを実感する」を見た瞬間だった。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

訪問先で学んだことを振り返る時間は、とても有意義で勉強になった。同じ体験をしても、それぞれ感じることは違い、様々な視点からのラオスを感じる事ができた。振り返ることによって新たな疑問が生まれ、そ

の場で現地の方に聞くことができた。また、青年海外協力隊の方と話すことにより、10日間では見きれないラオスの姿を知ることが出来た。現地で滞在するからこそ感じるラオスの姿だけでなく、客観的に見る日本の姿をどう思うかということも聞くことができた。滞在中、常に私たちの体調を常に気にしてスケジュールの管理をしてくださったおかげで、だれも体調を崩さず無事帰国できた。参加者は、不慣れで無理をしまいがちなので、これからも、参加者の体調第一ですすめていってほしい。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・視察先の資料は、読むだけではなく、インターネット等で深く調べて置くと、現地で役立ちます。
- ・頭の中に“なぜ？ どうして？”をたくさん詰め込んでいくと、現地での質問が多くでき、帰国してからの資料作りのヒントになります。
- ・日焼け・虫予防に長袖の上着やスカーフがあるといいと思います。
- ・着替えは3～4日分でいいと思います。

6. その他全般を通じての感想・意見など

この研修旅行で私が手にいれたものは、2つある。1つは、現地ではしか得られない知識だ。本物を見て、聴いて、触れるということは、本やテレビで得る知識とは比べ物にならないほど、価値のあることだと思う。ここで得た知識は、加工することなくそのままの姿を、授業や地域活動で伝えていこうと思う。もう1つは、この研修で初めて知り合った仲間。いつも先頭に立ち引張っていく係、疲れかけた時に梅干しやドライ納豆を持ってきて励ます係、常にメンバーの体調を気にしてコントロールする係、盛り上げてパワーを与える係、隣にいてだけで心を癒してくれる係、事前研修では誰よりも早く資料と知識を集める係、一番後ろで全員を見守る係…。すべて必要な係ばかりだ。担当は決めたわけではなく、自然に行動に出た。こんなに素晴らしい仲間に出会えたことを、私はとても嬉しく思っている。この研修で終わるのではなく、ずっと一緒に学び合い高め合っていきたいと思っている。

以上